

その日は、寝坊をしてしまった。蚊帳を吊った寝床から這い出て、顔を洗おうと裏庭に行くとおふくろが洗濯をしていた。

背筋を伸ばして欠伸をしながら空を仰ぐと、雲ひとつなく、太陽が東に聳える山の稜線から顔をのぞかせ、まばゆい夏の陽差しが庭の木々の梢をかすめて、まだらの模様を井戸端に投影している。

おふくろの肌着は、汗にまみれて背中に貼り付いている。野良仕事で赤銅色に焼けた腕が、泡立つ盥の中洗濯板をこすっている。小さなしゃぼん玉が風にあおられ、井戸をかすめながら、蟬の喧騒が渦巻く裏山に吸い込まれていった。

おれは、釣瓶を落として、井戸から汲み上げた水を頭からかぶった。冷たい水が一気におれを目覚めさせる。頭から水を滴らせていると、おふくろが手拭いを渡してくれた。

「安次郎、おまはん、これから海に出るんか？」

おふくろが、おじいのお真つ赤な褌を両手ではたきながら聞いてきた。井戸の傍らに立つ物干し竿には、おれの褌が風に靡いて白くゆらめいている。

「うん、今日も波がなさそうじゃし、家でおるより海の方が涼しいけん」

夏になると、晴れた日には、いつも海に出ている。三年前にヤマモモの木から落ちて足の骨を折って以来、海の方が気楽に過ごせるからだ。

「氣いつけん、あかんじよ」

左足を少しだけ引きずるおれを悲しげな目で見つめながら、おふくろが言った。

「家には、もうおまはんしか、跡取りがおりやせんのかけん」

おやじは三年前に南太平洋の島で戦死した。六つ歳上の兄貴はインドの戦地で消息不明となつて一年が経つ。祖母も他界し、いま一緒に暮らすのは、今年還暦を迎えたおじいと、おじいが二十歳の時に生まれたおふくろ、それと三つ歳下の妹だけである。妹は国民学校に通っているが、おれはその学校を今年の春に卒業した。同期の男友達の中には、在学中から海軍の予科練習生に志願したやつがいる。おれも七つボタンに憧れて志願したが、足の不具合を指摘され、失格の憂き目を味わっている。

戦争は四年前に始まった。おれが十二歳の時である。当初の戦果は、華々しく喧伝されたが、今に至っては日本の敗戦も目前のようだ。先月、大型爆撃機が徳島市の上空に大挙

飛来して、一面焼け野ヶ原になったと島の人が噂し合っていた。昨日も海に出て釣りをしている、アメリカの戦闘機が海面すれすれに飛んでいくのが見えた。おれは咄嗟に舟の下に潜りこんだが、相手はおれには目もくれなかった。胴体に星印を付けたグラマン機が三機、爆音を引きずりながら、鳴門海峡を跨いで紀伊水道に消えていった。

「おかん、おれの舟には、アメ公さんも興味がないようじゃけん、心配いらんわ。今日こそは鯛を釣ってきたるけん、待つといてや」

「ほんなこと言うても、隣村の萬次郎はんが機銃掃射を食らって、半身不随になったと聞いたでよ」

どこからそういう情報を仕入れてきたのか、普段、勝気なおふくろが心配そうに眉根を寄せた。

「萬次郎はんのは、エンジン付きの大きな船じゃけん、狙われたんとちゃうで。おれの手漕ぎのカンコ舟とは格が違うわ」

「ほんでも万が一ということがあるんじゃけん、あんまり沖へは出んようにしいや」

「分かった、そうする」おれは、おふくろを安心させることにした。「鯛の一本釣りはせんと、浅瀬でアワビかサザエでもかっさらってくるわ」

「ほうじゃ、それがええ。どっちみち、海に潜っとつたら、空の上からは目につきやせんじゃろうし……」

おふくろは愁眉を開くと、洗濯物を干しにかかった。

おれは、手拭いをおふくろに返して、裏山のすそ野に広がる畑に向かった。おふくろの手入れが入念に行き届いた畑には、多種多様の夏野菜が実っていた。人糞の肥料で育った野菜はどれもこれも見た目はいびつだが、味はしっかりとしている。陽射しを黒く照り返す茄子もふつくらとしてみずみずしく、生のままかじっても存分な甘みが果肉から湧き出す。茄子畑に隣接して、三日月のような果実を垂らしたきゅうり畑と赤く熟したトマト畑が、その奥に深緑色に盛り上がったさつまいもの畝山が続いている。おれは真っ赤なトマトをひとつもぎとって、口にはおばりながら母屋に戻った。

太陽は、中天に達しようとしていた。

播磨灘に面した島田島の北端にある田尻が浜の岸边に群生するハマボウの木が黄色い花弁を咲き誇らせている。砂利が敷き詰められた浜辺では、寄せては返す波が規則正しい潮騒の音を奏でていた。

おれと妹の加奈は、田尻が浜の入り江からカンコ舟を操って、小鳴門海峡の急流が播磨灘に注ぎ込む岩場に向かった。その岩場は、おじい秘密の漁場で、急流に逆らって踏ん張っているアワビには格別の滋味があるんじゃないやとおじい言っている。

波はないが、ところどころに小さな渦が巻いていた。おれは潮の流れが岸边に向かって逆流していく浅瀬に錨を降ろした。そこはちょうど潮の流れが停滞する場所でもある。

海に潜ると、テングサに隠れるようにして、アワビが岩の隙間にへばりついていて、サザエも同じように、岩の裏に身をひそめている。一時間ほどテングサの中に分け入って、たらい一杯のアワビとサザエを獲った。

舟に戻ると、加奈が網に入れて海面に浮かせておいたスイカを割っていた。スイカは夏の漁の必需品で、水分補給にはもってこいである。加奈は包丁でスイカを切り分けたあと、柄をつかってサザエの殻も砕いていた。サザエの生身は、海水でゆすいで食べると塩味が効いて絶品である。

加奈は、いつも献身的に尽くしてくれる。それというのも、おれの足の怪我の一因が彼女にあったからである。三年前の初夏、おれと加奈とおじい、裏山にヤマモモの実を採りに行った。おじいが育てたヤマモモの木には熟した赤黒い実が、枝がしなるほどにぶら下がっていた。おれは木登りが得意で、大きな木の枝の先まで腕を伸ばしてヤマモモの実をもぎ取っていた。すると、おれが踏ん張っていた枝に、加奈がふざけて足を乗せてきた。枝は腐食していたのか、二人の重みに耐え切れず、ぼきりと折れてしまった。おれと加奈は木から落ちたが、彼女の落ちた場所は、おれの足の上だった。

「あんちゃん。あんまり冷えてないけど、ええで？」

加奈が、黄色く熟したスイカを渡してくれた。潜ると喉が渇くので、冷えてなくともどうでもよかった。おれは、がむしゃらにスイカにかぶりついた。

スイカの食べカスを海に捨てて妹を見ると、具合でも悪いのか、うつむいて肩を震わせていた。胸にかかったおさげ髪が揺れて、赤い頬っぺたが妙にふくらんでいる。

「加奈、どないしたんじゃ」

「あんちゃん、出てるわ」

「出てるって……何が……？」

おれが不審げな顔をしていると、加奈が腹を押さえて身をよじりながら、おれの股間を指さした。

禪が緩んでいた。おれは慌てて立ち上がって、禪を締めなおした。

背後からポンポンと、焼き玉エンジンの軽快な音が聞こえてきた。

振り返ると、一隻の機帆船が北泊の岬を背にしながら、小鳴門海峡の潮流に乗って、こちらに向かっていった。大きな積み荷でもあるのか、住吉丸と書かれた船腹の喫水線が深く沈んでいる。船影が大きくなるにつれて、甲板に立つ数人の軍人さんが見えてきた。よく見ると、その中に椅子に座って微動だにせず、前方を凝視している人がいた。将校なのだろうか？ その人は軍帽を目深にかぶり、軍刀を膝の前に立てて、その上に白い手袋をつけた手を載せている。

住吉丸は煙突から黒い煙をまき散らしながら、淡路島の方角に波を切っていた。おれと加奈は、舟から立ち上がって敬礼をした。すると、操舵室の後ろの甲板で坊主頭の年若い男が帽子を振って叫んでいるのが見えた。

「おい、安次郎、元気にやっちよるかあ」

よく見ると、同窓生の山中だった。ああそうか、あいつは去年の暮れに、海軍の予科練に志願して合格したんだっけ。真つ白な予科練の夏服がまぶしく眼に映った。

茫洋とした水平線の彼方に浮かぶ入道雲から、突如、爆音が聞こえてきた。と思う間もなく、こちらに向かって飛んでくる二機の機影が見えた。いやな予感がした。どうか、日本軍機であってくれと心の中で祈った。だが、おれの祈りは空しかった。やがて、星印をつけたグラマン機が二機、鷲のように急降下をしながら、住吉丸に襲いかかった。

機銃掃射の炸裂音が海面上に響き渡った。最初の一撃で将校らしき人が船倉に崩れ落ちるのが見えた。

「加奈、泳いで帰って、おかんに知らせてこい！」

おれは怒鳴った。だが、加奈は動かない。

「どないしたんじゃ！」

「うちもあんちやんと一緒に行く」

加奈の眼は悲愴感に燃えていた。

「勝手にせえ」

時間がなかった。おれは力の限り、櫓をこいだ。

二度目の襲撃で、機帆船の燃料であるドラム缶が撃ち抜かれた。途端に船上は火の海となった。

どす黒く渦巻いた煙が船を包んでいる。いがぐり頭の予科練生が次から次と、甲板から海に飛び込んでいる。そんな中には背中に火を背負っている者も何人かいた。おれは、山中が帽子を振っていた船尾に向かった。

グラマン機が三度目の攻撃をしかけてきて、目の前の海面に二筋の水柱が走った。おれは思わず、身を屈めた。爆音が遠ざかったのを見計らって前を見ると、機銃弾が舟の舳先を撃ち砕いていた。砕けた木の破片が当たったのか、加奈の頬から一筋の血がしたたり落ちていた。それでも、加奈は気丈に前方を凝視している。なかなか、やるじゃないか、こいつは……おれは、妹を頼もしく思った。

グラマン機は三度目の攻撃をし終わると、旋回して南の空に飛び去った。加奈はサザエをつかみ取ると、飛び去った空に向けて、怒りの礫を投げつけた。

船尾にたどり着くと、山中が幼女を小脇に抱えて海に浮かんでいた。おれと加奈は、幼女に驚いたが、急いで二人を舟の上に引き揚げた。幼女が加奈の胸に抱きかかえられると同時に大きな声で泣き始めた。火傷をしているのか、両手が赤く腫れている。山中の右肩と脇腹からも血が滲み出ていた。彼は息をするのもやつとの態で、舟底に横たわっている。おれは幼女の火傷が気がかりで、舟を田尻が浜に急行させた。途中、いがぐり頭が海面に何個か浮かんでいたが、周囲を見渡すと漁船が数隻出っていたので、救助はそちらで間に合うだろうと考えた。

田尻が浜では、島の女連中が心配そうに海の彼方を見ていた。その中には、おふくろもいた。おれは、おふくろに幼女を預けた。山中の顔は血の気が失われ、蒼白になっている。止血用の包帯を巻いたが、助かるかどうかは神の思し召し次第だろう。彼は、おふくろに背負われた幼女を見届けると、おれの耳元でゆっくりと語り始めた。

昭和二十年七月二十九日、山中の所属する宝塚海軍航空隊に、淡路島の岬に砲台の陣地を築くための派遣命令が出された。選抜された二百名の派遣隊は、機雷が敷設されている大阪湾や紀伊水道を避けて、岡山から高松に渡り、そこから汽車を乗り継いで鳴門にやってきた。鳴門からは民間の船を二隻傭船して、淡路島に渡る計画だった。昨夜、撫養で宿営したあと、小鳴門海峡の北流（満ち潮）を利用するため、正午前に先発隊が出航することが決まった。すると、出航する直前に、幼女を連れた女性が船に便乗させてくれと哀願してきた。聞くと、淡路島に嫁いだ娘のお産の手助けに行きたいと言う。民間の定期船は運航を止めているので、ぜがひでも乗せてくれと泣きついてきた。分隊長は軍船だからと

強く拒否をしたが、山中は住吉丸の船長と謀らって、出航すると同時に母子を秘かに招き入れた。浅はかだった。なんということをやらかしてしまったのか。山中は悔やんだ。母親はドラム缶が被弾した時に全身火だるまとなって焼死した。この幼子だけは何としても助けたい！彼は脇腹と肩に銃創を負いながらも、幼女に火が移ったのを見ると、ためらわずに海の中に飛び込んだ。

何人かの予科練生が、田尻が浜に泳ぎ着いていた。中には裸同然で震えている予科練生もいて、島の女連中が身体を抱いて温めている。

おれは、再び沖に出ることにした。山中の話によると、住吉丸には百人を超える予科練生が乗っていたという。船は沈没を免れてはいるが、推進力を失って波間に漂っている。もうすぐ潮目が引き潮に変わるので、放っておくと、船は鳴門海峡の大きな渦潮に飲み込まれかねない。

おれがカンコ舟のもやいを解いていると、加奈が舟に乗り込んできた。

「あんちゃん、うちも行く」

その時おれは……沖に漂う住吉丸を見ながら、こいつはおれの命の恩人かも知れないなと、ふと、思った。

(了)